ホームレス家族

作：じーこ
絵：みかん

I章 悲劇(?)のはじまり

真結美は今日も家計簿を眺めながら暗い表情をしていた。

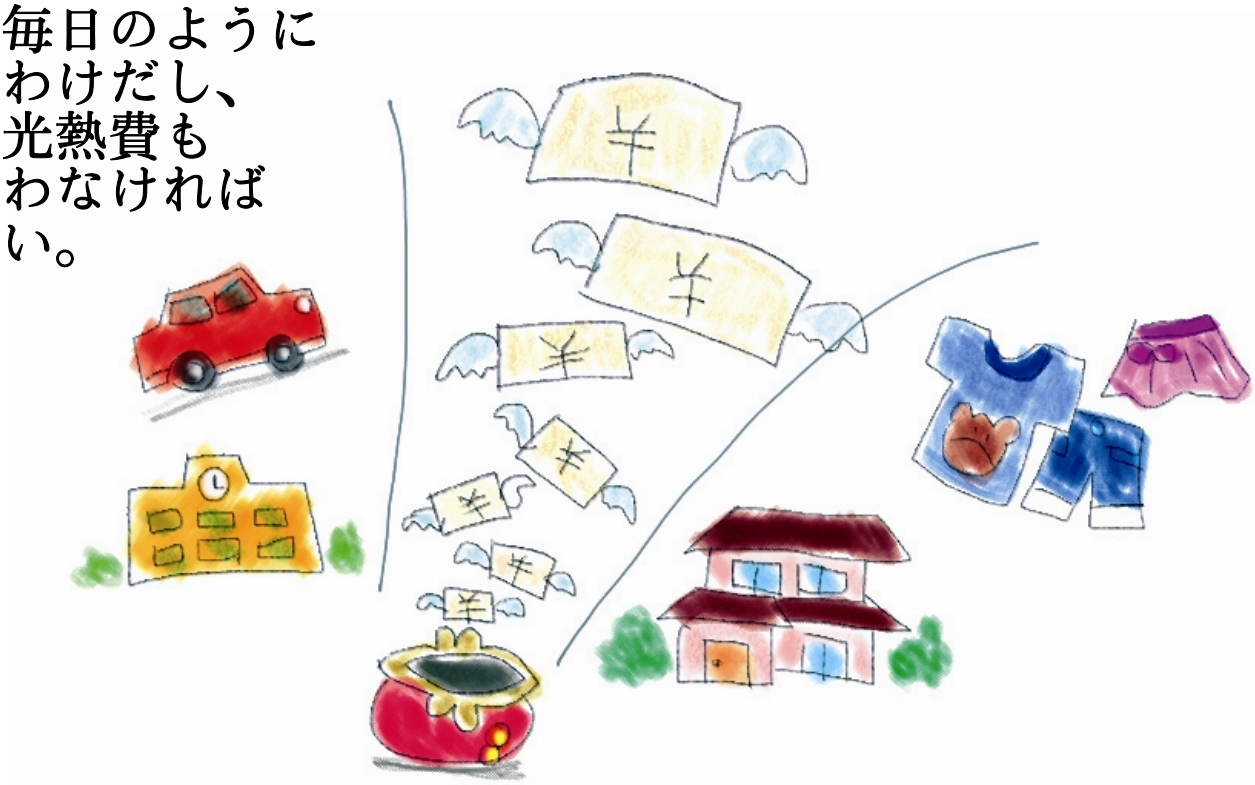
『お金が足りない！』

切実な悩みだった。
生活費が足りないのだ。

両親共働きなので、
３歳の息子を保育園に預けなくてはいけない。
保育費も結構バカにならない金額だ。

保育園のお母さん方との繋がりも、
いざという時のために繋いでおかないといけない。
そのためには交際費もかかる。

食費は毎日のように
かかるわけだし、
家賃も光熱費も
毎月払わなければ
ならない。



自分の服は何とか我慢してはいるが、
子供にはみっともない服は着せられない。
子供の服も、なんだかんだお金がかかる。
旦那にはもちろん洋服は我慢してもらうしかない。
自分だって我慢してるのだから、当然だろう…と思っていた。

毎晩、家計簿とにらめっこをしながら、ため息ばかり。
真結美にとって憂鬱な時間だった。

こんなに経済的に苦しい時期に限って、
大変な出来事が重なって起こるものである。

旦那がリストラにあい、会社をクビになった。

・・・、真結美のストレスは限界に来ていた。

今まで以上に、もっともっと自分に働けというのか。
家事だって、子供の送り迎えだって、
真結美が一人で頑張ってきたのだ。

旦那のリストラだけでも大変なのに、
嫌なことは重なるものだ。

今度は息子が突然倒れ、入院することになった。

どうも、精神的に参っているようだ。
なんで、息子が？

精神的に参っているのは、真結美自身だと、彼女は思った。

しかし、周りの目は冷たい！

息子が精神的に参っているのは、母親の愛情不足だと、
近所の人や親戚から責められた。

しかも、かばってくれると思っていた旦那にまで自分を責められた時は、とうとう真結美の中で何かがはじけた。

・・・・・

ふと気づくと、真結美は夜の街をさまよっていた。

会社がえりに飲んだくれて、
大声で上司の悪口を叫んで
いるサラリーマンが、あっち
こっちにぶつかりながら、
真結美の横を通り過ぎて行った。

シャッターの降りた商店街の
前で、ホームレスがゴミ箱を
あさっている。

『あ～、ホームレスになれたらいいなぁー』

半年後、真結美の家は差し押さえられ、家族そろって・・・、

晴れて、ホームレス となった！
世にもめずらしい、ホームレス家族の誕生だ！

Ⅱ章 ホームレス家族って、素敵じゃない!

ホームレス家族の一日は早い。

日の出とともに目をさまし、まだ人通りの少ないうちに、
近くの公園で顔を洗い、タオルで体も洗う。

周りの先輩ホームレスさん達に、教えてもらいながら、徐々
に身につけた習慣だ。

昼間は特にすることは
ないので、家族３人で
ゆっくり散歩をしたり、
公園でボール遊びを
したりする。

なんか、家があった頃には経験できなかった、
のんびりした生活である。

真結美は変な気分だった。

家族のためと思って、一生懸命に朝から晩まで働いていたのはいったい何だったんだろう。

こうやって家族３人で、１日一緒に過ごせること以上に
幸せなことなんてあるのだろうか？

なんで、仕事をしていたのだっけ？

思い出そうとしてみるが、よく分からない。

お金を稼いで生活するため？

いや、ちがう。

だって、ホームレス家族になっても、ちゃんと生きている。
この豊かな国、ニッポンでは、食べ物はあまって、捨てられているんだ。

これまた先輩ホームレスさん達が親切に教えてくれたが、
定時になれば、賞味期限の切れたお弁当が、
コンビニ裏のゴミ捨て場に捨てられる。

賞味期限がちょっと過ぎたって、食べられない代物ではない。
とっても美味しいお弁当ばかりである。

太ったホームレスがいるのも、納得がいく。

食べ物には困らないわけだから、
生きるため・・・、すなわち生活するために、
お金はなんとしても必要なものではない。

だから、ホームレス家族は仕事をしなくても、
大丈夫なのである。

『必要なものがない！』

・・・なんて時も、
ホームレス家族は大丈夫。

だって、ホームレス仲間の絆は深いんだから。

近くにいるホームレス仲間にちょっと悩みを話したら、
助けになるホームレスさんが、
街のどこからか、話を聞きつけて駆けつけて来てくれる。

みんな本当に親切！
みんな仲間を大切にしている。

家があった頃、隣の家にお醤油を借りにいった時など、
怪訝そうな目で見られたものである。

田舎では物の貸し借りは、
『困った時はお互い様！』と、日常茶飯事だったが、
都会では絶対あり得ないことだった。

ホームレスの方が、仲間どおしの繋がりが深いなんて、
これまた真結美にとっては意外な発見だった。

ちょっと旦那と隣町まで行ってこようと思ったら、
近くにいた先輩ホームレスが
息子の面倒を買って出てくれた。

頼んでもいないのに・・・。

以前だったら、心配や恐れが先行して、
他人に息子のお世話を頼むなんて考えられなかったが、

ホームレス家族になってからは、
他人の好意に素直に感謝することができるようになった。

そんな時に、以前だったら心配していた悪い出来事は、
絶対に起こらないものだ。

素直な感謝には、良い出来事しか返ってこない。

真結美は心の底から温かいものがこみ上げてくるのを毎日感じて、とても心が満たされていた。

充実した毎日を送れていることに、
とても幸せを感じていた。

なんか、家があった時より、

人間らしい！

Ⅲ章「人間らしく」ってどういうこと?

真結美には、疑問でならないことがあった。

なんで、今まで一生懸命生きていた頃より、
ホームレス家族になった今の方が、
「人間らしい」と感じるのだろう。

ホームレス仲間の中には、
その昔、教師をしていたという老人がいる。

その老人に相談すれば、なんでも解決すると噂だった。

『今度その老人に聞いてみよう！』
そう決意した、真結美だった。

最近、思ったことが現実になることが多い。

ある日、公園でその老人が
日向ぼっこをしているのを見つけたのだ。

真結美は老人に近づいて、話しかけてみた。

「横に腰かけても、よろしいですか？」

「あ～、いいとも。
　何か悩みでも、おありなのかな？」

さすが御老人。　察しが良い。

「はい。
　ホームレスになる前に人間らしい生活を高めようと、
　頑張って仕事をしていました。

でも、家族でホームレスになった今の方が、
人間らしく感じられて、幸せに感じるのは、
なぜなんでしょう。」

「人間性を高めるとはどういうことじゃと思う」

「生活レベルをあげることじゃないでしょうか」

「それも間違ってはいないと思うが、
わしはもっと大切なことがあると思っている」

「どういうことですか？」

「生きるものはすべて常に成長しておる。
人間も上を目指しているとすれば、
人間性の上は、我々は何性を目指していると思う？」

「えっ、何性？・・・人間じゃなければ、動物性とか。
いや、上ですもんね。
あっ、宇宙人性…ですか？」

「ホッホッホ。おもしろいの～。
その発想も悪くはない。

長くなるが聞きたいかな？」

「はい、時間はたくさんあります。
私、ホームレスですから。(笑)」

老人は真結美の目をのぞき込んで、微笑んだ。

老人はベンチに深々と座り直すと、話し始めた。

～～～～～

～～～～～

人は人間らしく生きようと人間性を高めておる。

では、具体的に何をしているかと言えば、

社会が決めた「人間らしさ」に向かって、
自分を合わせて行く作業をしている。

そこに個性はあってはならんのじゃ。

みんな同じ答えを出し、
同じように何でもできる様になることが、
人間性を高めるという事なんじゃ。

そういう風に、ほとんどの人間は思っておる。

だからこそ、幼い頃から学校でみんな同じ答えを出せるように訓練を重ねる。

誰かが決めた正解を、導き出せる頭を育てることが、
みんなが目指していることであり、
人間性を高めると言うことじゃ。

・・・そう、わしは思っちょる。

でも、ちょっと考えてみなさい。

いつ何時でも、同じ答えを
出すことが素晴らしいと
いうのなら、人間よりも、
ロボットの方が正確に、
間違いなく同じ答えを
出せると思わんか。

それに、その様なロボットのような人間ばかりになったら、
だれでも代わりがきくことになり、

その人その人の個性というものは否定されることになる。

個性があったら、同じことをしなくなる可能性があるから、
管理者には厄介だ。

もし、とっても個性的な誰かが会社を休んだとしたら、
代わりがきかないことになる。

そうじゃろ。

でも、同じ答えを出せることが大切なのではなく、
自分の頭でその時その時の状況を把握、分析して、
よりその場に適した答えを導き出せる人間の行うサービス
の方が、素晴らしいものに違いない。
つまりじゃ、

『人間性』の限界の殻を破り、

その上にいくために人が目指すのは、

『個性』なんじゃよ

人間性を目指している段階では、
「人間らしく」なることが大切だと考えられる。

個性を目指せるようになる段階では、
「自分らしく」なることが大切なことなんじゃ。

『自分らしさ』というのは、自分に対する自分の視点。

同じ視点で相手を見ると、『相手らしさ』と言うことになる。

人間性より個性を大事にし始めた人は、
『自分らしさ』と同時に、『相手らしさ』も大切にできる。
お互いを尊重しあうことが可能になるんじゃ。

これこそ、『人間らしさ』の先にある
素晴らしいものなんじゃよ。

我々ホームレスの仲間達には、
社会の歪んだ常識やマナー、地位や名誉、
お金に振り回されることに違和感を感じ、
もっと、個性を活かしたい、お互いを尊重し合いたいと思い、
社会からドロップアウトした人間が多い。

個性を活かして、みんなで協力し合って生きているから、
人間らしさの上の生き方ができているんじゃ。

それをあんたも、肌で感じ取ったわけじゃな。

大切なのは、これからじゃぞ。

ホームレスは、確かに個性を活かし、
仲間との絆を深めて、心豊かに暮らしておる。

ゴミ拾いをしたり、困っている人をさりげなく助けたり、
社会の役に立っているものも多いが、
もっと多くの人を喜ばせることはしていない。

これだけ時間はたっぷりあるわけじゃ。

見栄のためにお金を使うマインドも一切ない。

見栄を捨てて、ホームレスができるなら、
もっと世の中の人を喜ばせることもできるんじゃよ。

あんたはまだ若い！

ここの生活に甘んじていてはいけない。

家族と一緒に、世に羽ばたきなさい。

いろんな体験をすることが、人生じゃ。

体験を重ねれば重ねるほど、
人間は豊かになる。

同じ世界なのに、見え方が変わってくるぞ。　ホッホッホ。

Ⅳ章 新しい旅立ち

真結美は目を覚ました。

三日三晩、寝むり続けて
いたらしい。

夜の街に倒れているのを、
親切なご老人が助けて
くれたそうだ。

真結美の心は、晴れ晴れしていた。

とっても素敵な人生が外に広がっていることが、
今の真結美には実感できていた。

どう生きるか決めるのは自分だ。

どの道を選ぶかも、すべて自由。

自分で選択して良いのだ。

この世は、なんて素敵な世界だったんだろう。

『自分らしく生きよう！』

お　わ　り

あ と が き

39 歳で、はじめて『自分らしく生きたい！』と思えました。
すると、次々に必要なことが自分に流れ込み始めました。

自然の流れに素直に、目の前にあることを学んでいくうちに、
どんどん心豊かに、人生が潤っていくのです。

『自分らしく生きよう』とする仲間がどんどん増え、
みんなそれぞれの得意分野で、自分の持てる力を発揮するので、
みんなで助け合い、分かち合うことで、
物事がどんどん上手く回っていくのです。

この素敵な循環の輪を広めていきたい。

想いが明確になればなるほど、夢が現実になっていく。

この物語を読んでくれた素敵な仲間を大切に想い、
これからも一緒に豊かな世界を創造していきたいと思います。

最後までお読み頂き、本当にありがとうございました。
じーこ（澤田宏二）

※　この小冊子は自由にコピーして大切なお友達にプレゼントして頂いて結構です。

絵 / みかん・・〇オフィス・ミナコ〇みかんの似顔絵名刺屋さん☆
PC→　http://mikan-o.sakura.ne.jp/
携帯→　http://mikan.mobi
☆ブランドデザイナー☆　小熊 ミナコ oguma minako

作 / じーこ・・　歯と心と人生の専門家☆
① 歯医者　心のケアのできる総入れ歯専門医　http://souireba.com/
② リアルアイ　初級・中級・上級・ADコース　http://jikolize.com/
リアライジング　個人セッション提供　http://jiko-i.com/
③ 喜び家族　仕事と家庭の両立・融合　http://happydentist.jp/
☆人生ドクター☆じーこ 澤田　Koji Sawada